

資料5 高時川・田川の濁水モニタリング

大山明彦

1. 目的

令和4年(2022年)8月4日から5日にかけて上流部で発生した豪雨災害により、高時川では長期間にわたり濁水が発生している。特に出水時には下流の姉川や、農業用水路を通して別水系である田川にも濁水が流入し、両河川で琵琶湖からの遡上アユを採捕するヤナ漁への悪影響が懸念されている。そのため、両河川における高時川由来の濁りの状況を確認することを目的とした。

2. 方法

令和6年(2024年)4月11日から10月17日までの計13回(概ね2週間に1回)、姉川河口近くのヤナ場の下流と、田川のヤナ場の下流にあるカルバート下で透視度と採水による懸濁物量(SS)の測定を行った。

3. 結果

4月1日から10月17日までの間に高時川上流の柳ヶ瀬では日量50mm以上の降水が4月3日、5月28日、6月23日、7月1日、7月15日、8月31日の計6回あり、特に5月28日と6月28日には100mm以上となった。

姉川での透視度は5cm~50cm以上の値を示し、4月前半と6月後半、7月前後半の調査時には低い値を示した。またSSは0.8mg/L~135.3mg/Lの範囲にあり、透視度が低い時に高い値を示した。

一方、田川での透視度は27cm~50cm以上の範囲にあった。姉川とやや異なり、4月後半と6月後半、7月前半に低い値を示した。7月後半は姉川と異なり低い値を示さなかった。またSSは、3.1mg/L~20.6mg/Lの範囲にあり、昨年度同様最低値は姉川より高いものの、最高値は姉川より低かった。

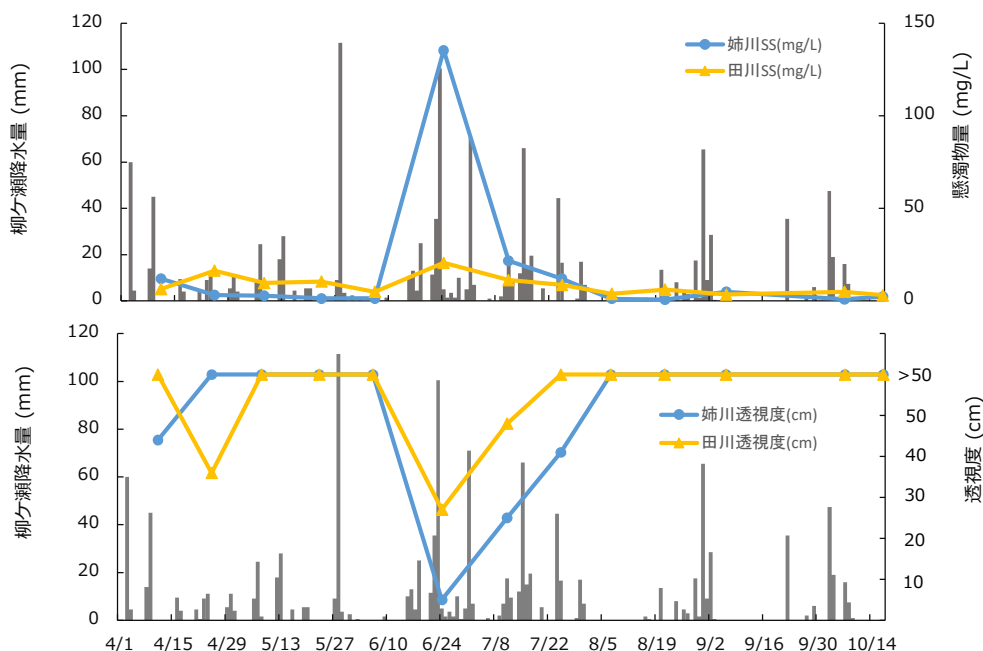


図 調査期間中の姉川と田川での透視度と懸濁物量、柳ヶ瀬の降水量の推移